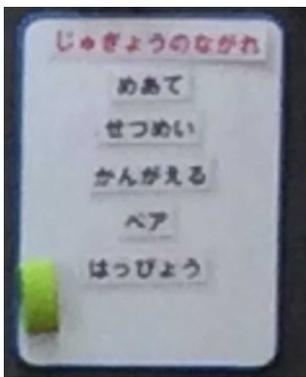




## 特別支援教育の視点を取り入れた新しい授業づくり ～「本時の見通し」をもつ～

前回に引き続いて、「ユニバーサルデザイン」を意識した授業づくりについて紹介したいと思います。前回「学習の見通し」を持つことが、発達障害を抱えた子供にとっては大切なことだと言うことを紹介しました。中でも、単元と本時で「見通し」を持たせる工夫が必要であるという話でした。

今回は、特に「本時の見通し」について、紹介いたします。この取組を必然として取り入れているのが、小学校の複式学級です。小学校の複式学級では、2学年が同じ教室で授業を受けており、それぞれの学年で異なる内容の授業を一つの教室、一人の先生で行われています。例えば、同じ国語の授業でも、片方は漢字をもう一方は読み物の教材を行っているという感じになります。すると、1時間の授業の中でどうしても子供たちで授業を進行していかなければならない場面が生じます。そういう状況なので、毎日日替わりで子供たちの中から司会進行者が決められていて、その子供が授業を進めています。しかし、子供の力で授業を進めるには、なかなかハードルが高いこともあり、複式学級ではよく「授業の流れ」を示し、どこで自分たちが授業を進めていくのか見通しを持って授業に臨んでいます。



この「授業の流れ」は、紀南地方のある小学校で実際に使われていたものです。ここには、「めあて」→「せつめい」→「かんがえる」→「ペア」→「はっぴょう」と記されています。この流れから推察すると、「かんがえる」以降から子供たちが自分たちで授業を進める（取り組んでいる）場面だろうと考えられます。このように、複式学級では、本時の流れに記しているのは授業内容と言うよりは、どちらかというと活動内容を記したものになります。こうすることで、子供たちが本時の学習の中で、どの場面で自分たちの活動場面があるのか見通しを持つことができるからと言えます。この取組を毎時間行っているので、小さなホワイトボードに取り外しの利くカードを貼り付け、授業によっては順番が入れ替えられるように工夫されています。特に、小学校は全ての教科を担当が教えるので、どの教科でも利用できるように学習内容ではなく学習活動を示すことで、この「授業の流れ」ボードは全ての教科で利用できるようになっていきます。このように「授業の流れ」を示すことは、子供たちに本時の見通しをもたせることができ、学習活動を円滑に進めることができる役割を果たしているのです。